

点を言う、I部の解説中もうちょっと附加してもらいたい点があること。たとえば hot spots について書いてないし、岩石の成分も、アポロの各飛行毎に平均して書くのはどんなものか。また月には流体核がないという説も、かなり長く信ぜられていたが、月震の観測からはそれが疑問視されている。そして図10には「核(?)」とだけ書かれていて本文中に説明がなく、読者を混乱させる。また月の裏側のクレーターで、日本人名がついたものは、平山信と平山清次が同一のクレーターにつけられているので、人数は7名だが、クレーターは6個なのである。この点も説明してほしい。またI部とII部で、固有名詞に原語を附記したものは、原語の綴の誤、表記の不適切なものが数個もあった。(関口直甫)

彗星の話

富田弘一郎著

(岩波新書, 280円)

この本は痛悔の章で始まります。1972年のジャコビニ流星群、1973年のコホウテク彗星、と2回も続けて天文学者の予想は当りませんでした。大流星雨、大彗星が見られるだろうという予想が大きく報道されたのに全く貧弱なものしか見られなかったのです。このために1976年3月3日にウェスト彗星が雄大な姿を東の空に見せた時は新聞に予報も載らず、従ってごく限られた人しか見ることはできなかったのです。「もしも日本中にひびく半鐘があればそれを打ち鳴らしてでも日本中の人を起こして、皆にこの彗星を見て貰いたかった。」と著者は考えたのではないのでしょうか。天文学にかけた著者の情熱を知る私にはそう思えるのです。

その後彗星の名前のこと、彗星をさがす人達のこと、苦勞話、道具になる眼と望遠鏡の話、彗星の軌道、形状、大望遠鏡、彗星の仲間、と話はずづいて行きます。読んでいるとあたかも曇りの夜に観測所の待機室で晴れるのを待ちながらストーブを囲んで富田さんの話を聞いているような感じになります。

日本のアマチュア天文学者による彗星探しは今や世界で有名です。現在の小、中学生の天文ファンの数を考えると日本人による彗星発見の率は増えこそすれ減ることはないでしょう。本書は第一線のアマチュアを目指す人にとっては双眼鏡の選び方から手を取るように教えてくれる良き入門書であり、発見の際はどうかというハンドブックであり、曇った夜のつれづれを慰める座右の書です。天文学者には天文学史の本に入るには生々しすぎる、そうかといって天文学の教科書には書かれることのない数々のおもしろい話を提供してくれます。もちろん彗星についての諸々の知識を一冊にまとめた大変便利な本です。スペクトルに関する記述はもうすこしあった方が良かったように思いますが。そして一般の読者にとっては彗星というものを通して天文学と天文学者を知る良い解説書となるでしょう。(成相恭二)

訃報

本会終身会員水野良平氏は、1978年8月22日に78歳で逝去されました。謹んで御冥福をお祈りすると共に、会員諸氏にお知らせ申し上げます。

訂正

本誌7月号と8月号の天文暦の表の1部に誤りがありました。下表の通り訂正すると共にお詫び致します。

○7月の天文暦

20日6時 月 最近 (欠落)

○8月の天文暦……月に関する記事の全部を入れ替え。

2日12時 月 最遠 18日19時 望

4日10時 朔 25日21時 下弦

12日5時 上弦 29日22時 月 最遠

17日17時 月 最近

1978年7月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	—	—	6	5,	60	11	8,	102	16	7,	81	21	11,	34	26	1,	1
2	6,	35	7	9,	61	12	9,	75	17	7,	109	22	—	—	27	1,	1
3	5,	28	8	8,	58	13	6,	92	18	9,	78	23	7,	19	28	5,	16
4	7,	40	9	8,	51	14	—	—	19	12,	72	24	6,	12	29	5,	14
5	5,	51	10	12,	83	15	7,	109	20	10,	40	25	8,	21	30	4,	18
															31	6,	26

(相対数月平均値: 85.6)

昭和53年9月20日 発行人 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 社団法人 日本天文学会
 印刷発行 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251 啓文堂 松本印刷
 定価 300円 発行所 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 社団法人 日本天文学会
 電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359 振替口座 東京 6-1 3 5 9 2